

明石の史跡（４８）明石共就社



明治14年（1881）6月10日の朝野新聞には、同5日明石藩旧士族の合資により設立された、共就社の開業式の様子を、次のように報じている（『明治ニュース事典』2. 5頁）。

今度兵庫県下播州明石の士族五百余名が協力合資して、各産業に就き生活の道を立てんと創立せし織工場は、土木の功を竣え社名を共就社と号し、去る五日を以ってその開業式を行えり。同県令森岡昌純、一等属加集寅次郎、授産掛り山工女六十余名出場の上、各祝文の朗読或いは演説をなし、式おわりて一同祝酒を傾けて退散としとの報あり。

明治新政府の最大の課題のひとつが、「廃藩置県により身分を失った者への補償公債」の発行である（『岩波日本史辞典』）。要するに有禄武士への退職金であった。

明治11年（1878）1月、兵庫県の有禄士族6, 895名に支給された、一人当たりの平均支給額は542円余という（『明石市史』下. 66頁）。このころの3, 000円が、現在の1億円ともいわれており、ざっと1, 700万円程度となる。これではゆとりのある生活は望むべくも無い。大多数の武士がプロレタリア化したという。

「虎の子」を出資して立ち上げた共就社であったけれども、その半年後の10月21日、松方正義が大蔵卿となり、いわゆる松方財政（デフレ政策）の逆風に直面。明治19年（1886）には消滅してしまった（同書72頁）。経営の指揮をとった人物にその責任を問うつもりはない。しかし、この10年のちに鐘紡兵庫工場が操業を開始。19歳で米国留学。苦学した武藤山治の経営手腕により躍進したのを見れば、時の流れというべきものであろうか。